



町民文芸

只見短歌会

六月詠草

大塚栄一

指導

屋根よりも伸びし白樺伐りたけれど孫誕生の年に植ゑたり

馬場 八智

吉津 政枝

濁流に吞まれ今なほ七千人も不明者多く心痛むも

古川 英子

田植後の整形外来混み合へば壁にもたれて順番を待つ

目黒 富子

師の歌集の頁開きて供へあり従妹の笑みし遺影の前に

五十嵐英子

久びさに外泊に来て妹の庭のつつじの花殻を摘む

渡部ゆき子

学院にいちごを持ちて帰る孫が放射能汚染は大丈夫かと言ふ

五十嵐夏美

知恵遅き子に薄皮を剥かせれば気の減るほどに芋削るなり

皆川 恒子

膝痛みかがむこと出来ぬわれなれば板の間拭くさへ頭痛伴ふ

渡部ヨリ子

病みをれば雀鳴く声も騒がしく夢うつつに臥す耳に入りくる

新国 洋子

園芸の売上げ少なくこの夏は昆虫扱ふと孫は勢ふ

(出 詠 順)

只見俳句会

七月例会

目黒十一

指導

髭剃りの鏡に揺るる吊忍

邦 夫

敦公の声すべり来る只見ダム

康 女

エプロンの白さ干されて夏に入る

草刈の音ひびき来る朝の空

リウコ

夏至近き夕べカーテン早も引く

莢豌豆離れ住む子を思いおり

笑 羊

玉葱の連る軒の仮住い

寿命という贅沢のあり竹煮草

都

夏つばめ小さきクツの右左

ぶな若葉しかと結んだ登山靴

一 穂

初なりの茄子一つもぎ今日は夏至

花三つ数えて植えるトマトかな

洋 子

朝顔やつかまり立ちの一番花

邦 男

発つ人の荷の重たさを立葵

いたどりの花穂の先の紅の色

敦 子

朝靄や赤翡翠の声響く

礼

七夕竹担ぎ下ろさる幼稚園

七夕の心底酔うてみたさかな

修 一

アウトレット素足のヒール行き交える

不安げな葛の手朝日へ向かえけり

恒 夫

風光る尾瀬木道の女声

無住寺の屋根にアンテナ梅雨の晴

吉 児

外苑の軍靴の跡や梅雨の蝶

はとバスを連ね名利風薫る

隆 堂

椽咲くや養蜂箱の並べられ

青山椒遅き夕餉の膳に待つ

邦 男

初夏や海輝ける佐度ヶ島

更衣声掛けてゆく登校児